

研究課題名	音楽に付随するエンカレッジ機能を援用した「自立活動」の教材開発
研究代表者	上野 智子（和歌山大学 教育学部 准教授）
共同研究者	菅 道子（和歌山大学 教育学部 教授） 山崎 由可里（和歌山大学 教育学部 教授） 沼田 里衣（大阪公立大学 文学部 准教授）

1. 本研究の目的（問題の所在にみる本研究の特色および重要性）

本研究は、特別支援学校の教員を対象とし、音楽に付随するエンカレッジ機能を援用した「自立活動」の教材開発を行うことを目的とする。

和歌山県下の特別支援学校教員を対象とした近藤らの調査※では、（１）約 8 割の教員が音楽療法に関心を持ち、4 割の教員が「自立活動」で音楽を活用した授業を経験しているものの、（２）①主指導の経験者は 1 割と少なく、その理由は、音楽は好きだが楽器演奏等に苦手意識があり、加えて、②個々の児童に対応可能な即興表現活動の経験が特に乏しいことが明らかにされている。しかし、「自立活動」で教師に求められるのは、高度な演奏技術ではなく、音楽に付随するエンカレッジな機能に着目した活動、とりわけ即興表現活動を取り入れることではないかと考える。

2. 研究の計画と経過

以上をふまえ、本研究では、（１）即興表現を中心とした、多様な人々とのコミュニティ音楽活動を実践・研究している大阪市立大学の沼田里衣氏と共同研究を進め、（２）音楽に付随するエンカレッジ機能を援用した「自立活動」の教材開発を行い、教員研修型のワークショップ（遠隔と対面のハイブリッド）によりその実効性について検証する計画を立てた。しかし、（２）については、遠隔による実施からコロナ禍の状況に鑑みて、急遽 A 特別支援学校の教員を対象にしたワークショップ型の研修動画を作成することに変更した。そして 2022 年 3 月 18 日に大阪市立大学にて動画撮影を行った。

撮影に先立ち、事前に A 特別支援学校小学部の教員から授業で音楽を活用する際の疑問や悩みとして示された即興表現を伴う 3 つの課題（①応答型の曲でのやりとり（音楽による双方向的なやりとり）、②楽器の鳴らし方（児童がイメージをもって楽器を鳴らせるような工夫）③動きの工夫（教科書に掲載された楽曲と身体表現を結びつけるための活動の工夫）を和歌山大学教員（上野、菅、山崎）と、阪神間で活動するコミュニティ音楽団体「おとあそび工房」のメンバー 8 名、及び大阪公立大学教員（沼田）で共有した。撮影当日は、各課題に対して双方がアイデアを出し合いながら実演するという形をとった。

3. 研究の成果と今後の課題

本取り組みを通して、即興音楽表現には、多様な形態（単独・集団）や方法（身体表現・楽器演奏・描画等）の選択肢があること、加えてそこには「問いかげに答える」という構造が通底していることを見いだした。具体的には、「どんな色が好き？」と問いかける歌【問いかげ】から、即興的にクレヨンで描いた絵が生まれ【応え】、そこから選んだ一枚の乗り物の絵（パトカー、救急車、消防車）【問いかげ】を題材にし、参加者はインスピレーションを得て音楽を即興【応え】するといったやりとりが挙げられる。ワークショップでは、「問いかげに答える」構造の中、参加者によって次々と新しい遊びが生み出されていった。新しい遊びが生まれる際には、誰もがおしゃべりをするような気軽さでアイデアを出しあうことができ、言葉・音楽・動きなどの多様な対話が生まれた。こうしたやりとりのもと参加者全員が「いま・ここ」で作り上げる作品は、音楽表現に対する既存の、もしくは一般的な価値観に囚われず、「価値あるもの」として共有されていった。

また、こうした活動は、参加者の流動的な関係性を生むとともに、参加者相互が必要不可欠な存在であるこ

とを体感・実感する場になる。このことから、多様な形態と方法を備えた即興音楽表現は、音楽に付随するエンカレッジ機能を引き出す最適な具体であるといえよう。

今後は、本取り組みで得た知見を整理して教員研修の動画教材を開発、及び教員研修を実施し、2022年度の日本音楽教育学会での発表、学会誌への投稿を予定している。

※近藤親子・上野智子・菅道子(2020)和歌山県内の特別支援学校における音楽活動に関する調査結果報告書